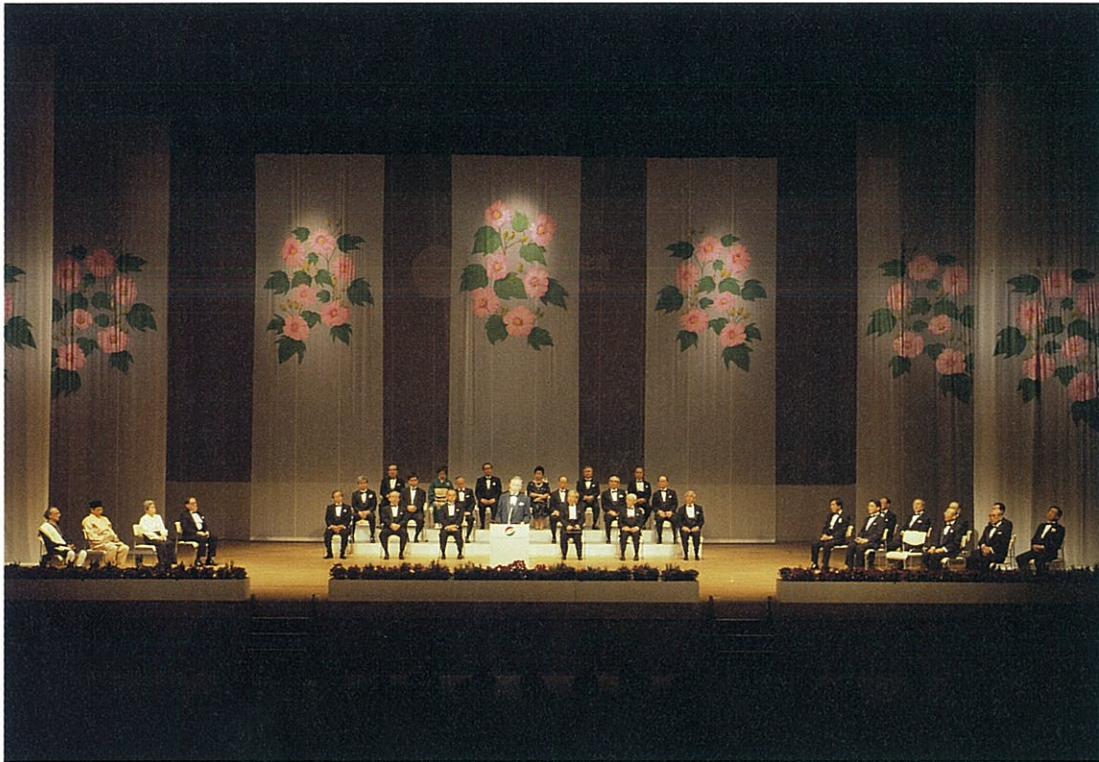




THE FUKUOKA
ASIAN CULTURAL PRIZES

1991年（第2回）
福岡アジア文化賞

THE 2nd
FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES
1991



1991年（第2回）福岡アジア文化賞授賞式
The 2nd Fukuoka Asian Cultural Prizes 1991 Presentation Ceremony



会場を埋めた授賞式参加者
The ceremonial hall was filled to its fullest capacity.



桑原市長より、ラヴィ・シャンカール氏
にメダル、賞状の贈呈
Mayor Kuwahara presented the
Grand Prize diploma of honor
to Pandit Ravi Shankar.

タウフィック・アブドゥラ氏への
賞状を読みあげる川合理事長
Mr. Kawai, Chairman of the
Yokatopia Foundation, read
Dr. Taufik Abdullah's award
citation.



授賞後、握手をかわす中根千枝氏
と川合理事長
Mr. Kawai congratulated
Dr. Chie Nakane.

川合理事長からメダル、賞状を受け取る
ドナルド・キーン氏
Mr. Kawai presented the medal
and diploma of honor to
Dr. Donald Keene.





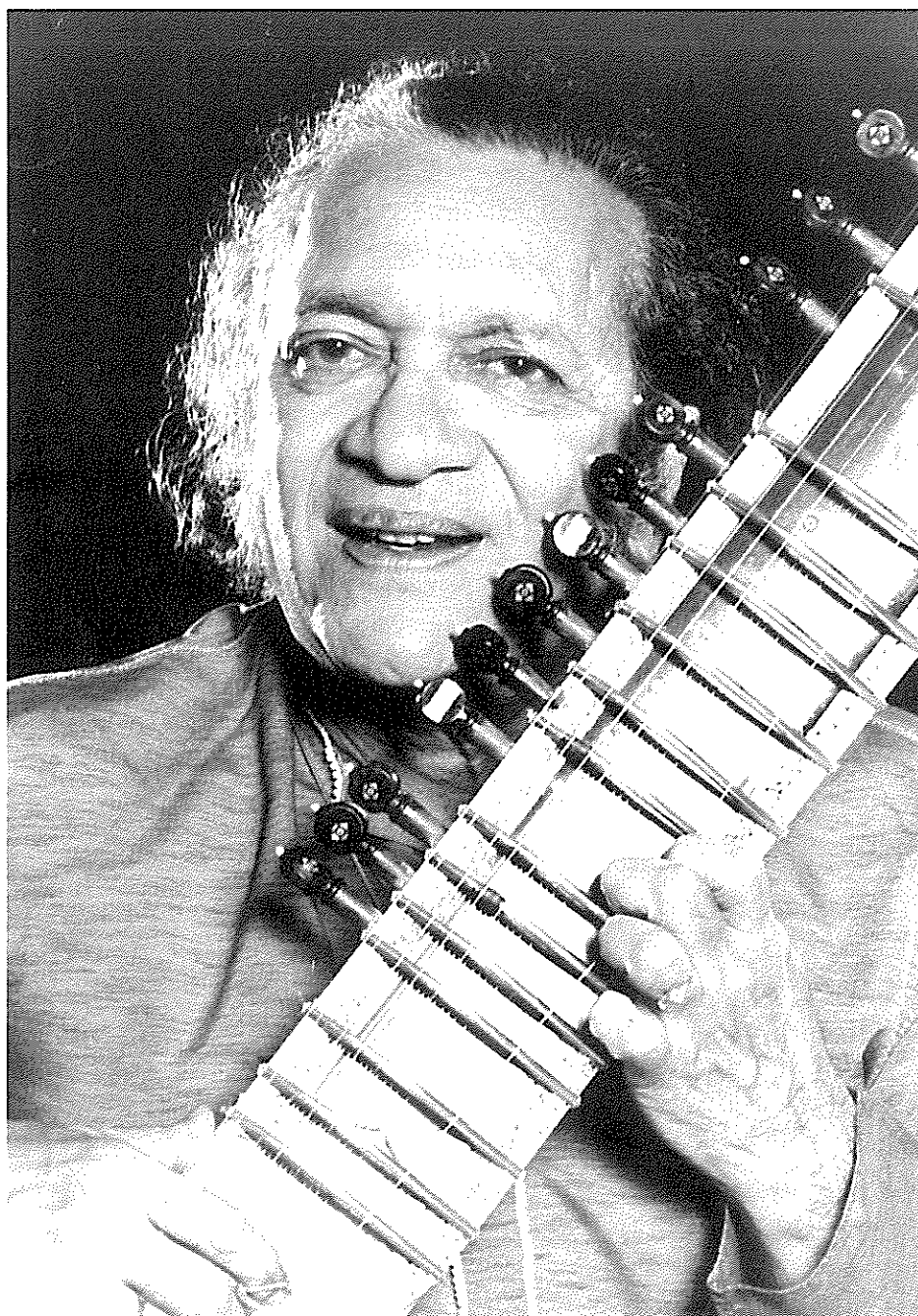
授賞式のフィナーレ。各国大使御夫妻もステージに上がられ、受賞者を称えられた。
The Prize Presentation Ceremony Finale : On the stage, the Ambassadors of Asian countries and their wives praised the recipients.



送られた花束を手にする受賞者と奥様
A photographic opportunity of the Prize recipients and their wives with flower bouquets



シタールの特別演奏を行うラヴィ・シャンカール氏
Pandit Shankar performed a Special Performance.



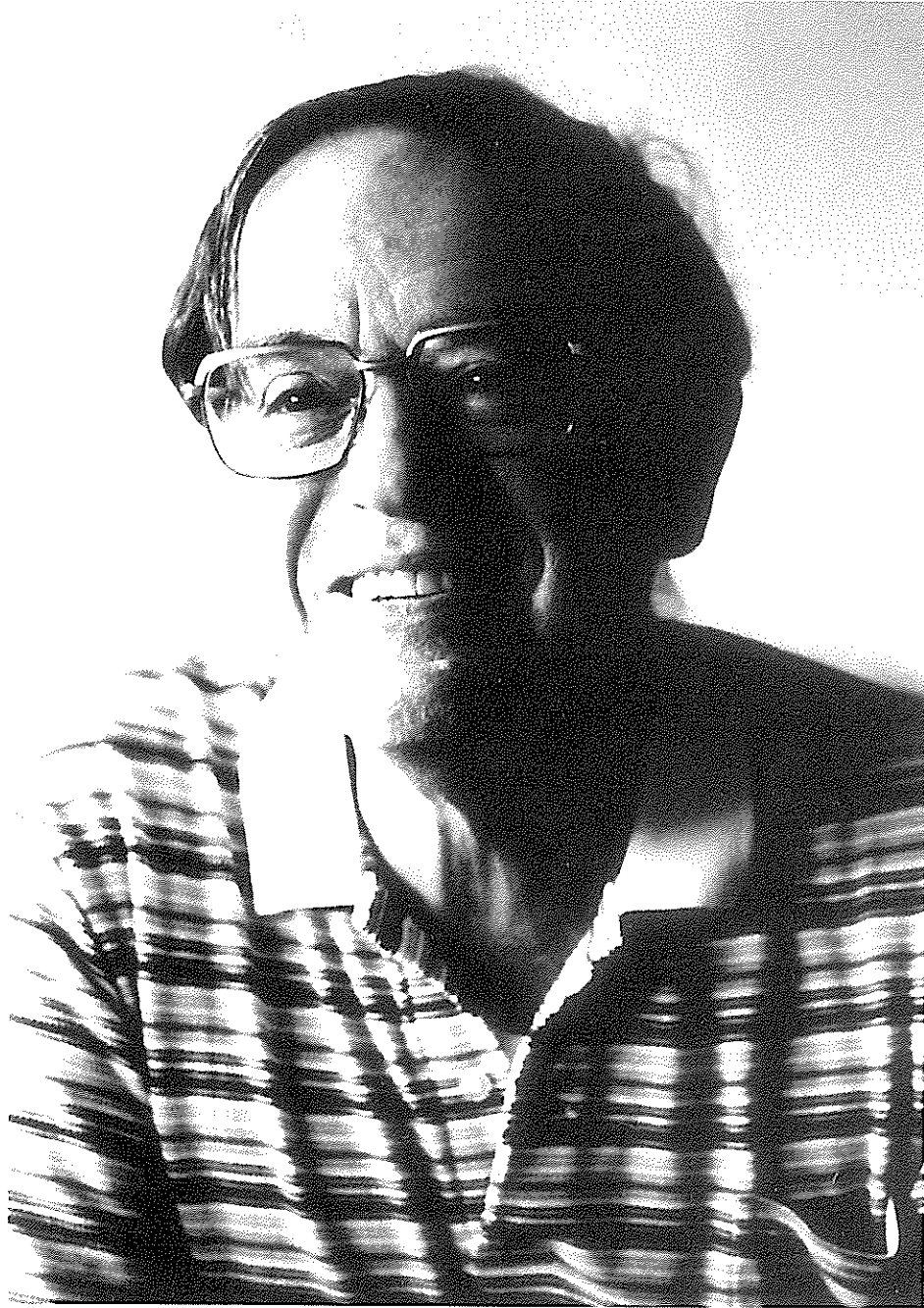
ラヴィ シャンカール
Ravi SHANKAR



タウフィック アブドゥラ
Taufik ABDULLAH



中根千枝
Chie NAKANE



ドナルド キーン
Donald KEENE

大 賞

氏 名 ラヴィ シャンカール
(Ravi SHANKAR)
生年月日 1920年4月7日 (71歳)
国 籍 インド



プロフィール

北インドのヴァラナシに生まれたラヴィ・シャンカール氏は、10歳のときに兄ウダイ氏の主宰するインド舞踊団についてフランスに渡り、その後、18歳になるまで、舞踊団の一員として欧米各地の公演に参加。この少年時代の西洋体験は、同氏のその後の芸術活動に深く影響している。

帰国後、師アラーウッディーン・ハーン氏の下で、インド古典音楽の研鑽を重ねた同氏は、精力的なコンサート活動に加え、舞台音楽、映画音楽などを手がけ、その豊かな才能を開花させていく。サタジット・レイ監督の映画『大地のうた』三部作では、映像を支える美しい音楽で世界中の多くの人々に深い感動を与え、アジアの民族音楽の正しい評価を、さらに幅広くもたらすことになった。また、メニューイン氏（バイオリニスト）等西洋の偉大な音楽家たちとの共演を試み、インドの楽器シタールが西洋音楽にも調和することを証明した。

同氏の豊かな才能は、指導的な側面にもみることができる。音楽学校を設立し、後進を育成する一方、米国の大学で教鞭をとるなど、若い世代と積極的に接触した。

同氏の幅広い演奏活動は、現在に至るまで、世界各地で意欲的に展開されるとともに、オーケストラを始め、ロック、邦楽、前衛音楽等との様々な「出会い」を生み出している。

主な作品

○映画音楽

サタジット・レイ監督『大地のうた』三部作 (1955, 56, 59)

R・アッテンボロー監督『ガンジー』1985

○作 曲

『ラーガ・ジョゲシュワリ』1969 『シタール・コンチェルト1番』1970

『シタール・コンチェルト2番』1980 『マハトマ・ガンジーに捧ぐ』1982

『ガナシャム』(オペラ) 1989

○著 作

『My music, My life』1969

贈賞理由 〈ラヴィ シャンカール〉

ラヴィ・シャンカール氏は、アジアにおける音楽の巨匠であり、国際的に知られたインドの楽器シタールの演奏家である。

従来、西洋音楽にしか、その真の芸術的価値を認めなかった世界の音楽界にとって、同氏の出現は、まさに驚異であった。同氏が、アジア固有の芸術性の高さを広く世界に認識させた功績は、まさに偉大というべきものである。

同氏は、少年期に、兄ウダイ氏の主催する舞踊音楽団に同行し、欧米各地の演奏旅行に参加。インド音楽や、西洋のクラシック音楽からジャズに至るあらゆる音楽を直接耳にし、さらに、西洋の優れた音楽家に接する機会にも恵まれた。このことが、同氏の天賦の優れた才能を開花させ、その後の芸術活動に深く影響することとなった。

同氏は、1956年のカンヌ映画祭で、特別賞を受賞したサタジット・レイ氏の映画『大地のうた』の音楽を担当し、美しい映像とあいまって、世界中の人々に深い感動を与え、映画音楽に対する認識を高めたばかりでなく、インド音楽評価に新たな局面を切り開くことに成功した。その後、世界各国の様々な音楽家との共演など、国境を超えた多面的な活躍を続け、美しいシタールの響きにのせた平和のメッセージを世界中に発信してきた。同氏の演奏を通じ、東洋の音楽が、西洋に伝わるだけでなく、西洋音楽の既成の殻を打ち破り、新たな展開のきっかけを提供することとなったのである。また、同氏作曲の協奏曲は、ロンドン交響楽団やニューヨーク交響楽団等世界的に著名なオーケストラによって演奏され、高い評価を受け、世界各地でのコンサート会場は聴衆の賛辞の声で満ち溢れた。

一方、同氏は、自ら音楽学校や研究所を設立し、アメリカの大学でも教鞭をとるなど、後進の育成に心血を注ぎ、優れた芸術の継承に大きく寄与している。

このように、ラヴィ・シャンカール氏の功績は、東西文化のかけ橋という役割を果たしただけでなく、世界中にアジアの意義を示したと評価できるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞大賞」に相応しい業績といえる。

学術研究賞・国際部門

氏名 タウフィック アブドゥラ
(Taufik ABDULLAH)

生年月日 1936年1月3日(55歳)

国籍 インドネシア



プロフィール

西スマトラのブキティンギに生まれたタウフィック・アブドゥラ氏は、読書好きの父の影響を受け、まじめで勉強熱心な少年だった。ある日、外国の雑誌で欧米の都市の写真を見て、将来外国へ行くことを夢見るようになった。

ガジャマダ大学卒業後、その夢は実現し、インドネシア研究の殿堂、米国コーネル大学に留学して、博士号を取得している。帰国後、インドネシアの地方史、開発問題、イスラム研究に関する学術的な著作を数多く発表し、研究者としての高い評価を確立した。

若くしてインドネシア科学院(LIPI)社会経済研究所の所長を務めたこともある同氏は、国内最大の社会科学学会や東南アジア社会科学協会(YIIS)の設立に尽力し、東南アジアにおける健全な学界の創造、社会科学の水準の向上に努めた。また、他方で、欧米、アジア各地での客員研究やセミナー、講演等の学術交流活動も精力的にこなし、海外における正しい東南アジア理解のために貢献するなど、その業績は内外で高く評価されている。現在、LIPI社会文化研究所上級研究員(教授)である同氏は、アジアでも有数の歴史学者、社会学者として名高い。

主な著作

『アダットとイスラム——ミナンカバウにおける葛藤の検証』1966

『学校と政治——西スマトラのカウム・ムーダ運動(1928—1933)』イサカ(ニューヨーク州), 1971

『若者と社会変革』(編著), 『歴史と歴史的意識』1974

『宗教・労働倫理および経済開発』(編著), 『インドネシアの地方史』(編) 1977

『インドネシアにおける社会科学の傾向と展望』, 『真実のインドネシア』(編) 東京, 1979

『インドネシアのイスラム』(編) 東京, 1985

『歴史と文学』(編著), 『東南アジアにおけるイスラムと社会』(共編) シンガポール, 1986

『イスラムと社会—インドネシア史再考』, 『歴史と社会—インドネシアのイスラム』(編著) 1987

贈賞理由 <タウフィック アブドゥラ>

タウフィック・アブドゥラ氏は、インドネシアのすぐれた歴史学者であり、同国を代表する第一級の国際的知識人である。

現在、インドネシア科学院社会文化研究所の上級研究員である同氏は、ジョグジャカルタのガジャマダ大学を卒業後、インドネシア研究で名高い米国コーネル大学で、郷里西スマトラにおけるイスラム改革運動の研究を取り上げ、博士号を取得した。この研究によって、柔軟な思考法と独創的な研究視角を評価された同氏は、帰国後、つねに真摯な研究倫理を貫きながら、倦むことなく学術的な論文・著書を発表してきた。それらは、インドネシア地方史、知識人論、イスラム論、開発問題論等、いずれも世界最大の群島国家インドネシアの歴史的現実と切り結ぶものであり、国際的にもインドネシアにタウフィックありという評価を勝ち得てきた。中でも、地域社会それ自身の内発的な力に視座をすえた地方史の方法論を確立するとともに、東南アジアのイスラム研究に新局面を開いたことは、インドネシアのみならず東南アジアの歴史学の発展に多大の貢献をなすものであった。その方法は、インドネシアを国民国家、地方史、イスラムの三つのベクトルから解明しようとする意欲的な研究枠組みに基づいており、それは、今まさに形成されつつある東南アジア研究のフロンティアを切り開く業績として注目されてきた。

同氏はまた、若くしてインドネシア科学院社会経済研究所所長の要職を務めたほか、国内最大の社会科学学会や、東南アジア社会科学協会の設立に尽力し、東南アジア全体の社会科学水準の向上と後進の育成に大きく貢献してきた。さらに、東南アジアにおける活動に加えて、米国、オランダ、オーストラリア、日本等の研究機関との学術交流を積極的に推進し、各種の共同研究を実現した。これらの学術活動は、一人の歴史学者であるとともに、20世紀の東南アジアの知識人としての知的誠実さに裏打ちされて、国際的にも幅の広い共感を呼び、まさに、現在から未来へと向かう東南アジア理解のために、東南アジアはもとより、広く海外において大きく寄与するものであった。

このように、タウフィック・アブドゥラ氏の学術研究における輝かしい功績は、人々のアジアに対する理解に大きく貢献をなしたと評価できるものであり、まさしく、「福岡アジア文化賞学術研究賞・国際部門」に相応しい業績といえる。

学術研究賞・国内部門

氏名 中根 千枝
(なかね ちえ)

生年月日 1926年11月30日(64歳)

国籍 日本



プロフィール

東京に生まれた中根千枝氏は、父の仕事のため中国に移り、少女時代を大陸で過ごした。この体験が、同氏の目をアジアへ向けるきっかけとなり、後の研究に多くの影響を及ぼしている。

帰国後、津田塾大学を経て東京大学、同大学院に進み、中国とチベットを中心に東洋史学を専攻した。1953年から57年の間に北インド、アッサム地方等でフィールドワークを行い、イギリス、イタリアに留学し、社会人類学、チベット史の研究を重ねる。その体験に基づく『未開の顔・文明の顔』は、人々の異文化への関心を高め、人類学界へ新風を吹き込んだ。その後、研究はアジア全域へわたり、その豊富な調査と比較の視点をもつ考察により、アジア諸民族の社会的特質をとらえ、日本における社会人類学の研究を飛躍的に進展させた。代表的な母系社会論、家族構造論、社会構造論は、評価が高く、特に「タテ社会論」は各国で紹介され、世界的に日本に対する理解を深めている。

一方、多くの研究者を養成し、国際会議等においてめざましい活躍をなし、その高い国際性を生かして世界のアジア理解促進に多面的に大きな貢献を果たしている。

主な著作

『未開の顔・文明の顔』1959

『Kinship and Economic Organization in Rural Japan』ロンドン,1967

『Garo and Khasi-A Comparative Study of Matrilineal Systems』パリ,1967

『タテ社会の人間関係——単一社会の理論』1967 (『Japanese Society』ロンドン,バークレイ,1970)

『家族の構造——社会人類学的分析』1970 『適応の条件——日本的連続の思考』1972 『家族を中心とした人間関係』1977

『タテ社会の力学』,『日本人の可能性と限界』1978

『社会人類学——アジア諸社会の考察』1987

『Tokugawa Japan-The Social and Economic Antecedents of Modern Japan』〈共編〉1990

贈賞理由 〈中根千枝〉

中根千枝氏は、日本を代表する社会人類学者である。

少女時代、中国大陸で生活したことによりアジアに関心を持つようになった同氏は、探検家ヘディン等の著書に触れ、民族研究を志すようになった。津田塾大学を経て、東京大学に進み、中国とチベットを中心に東洋史学を学んだ同氏は、1952年同大学院終了後、東京大学東洋文化研究所に助手として入所する。

1953年から3年間インドに滞在、アッサム地方でのフィールド・ワークに携わる。その豊富な調査結果を携えて渡欧し、ロンドン大学で社会人類学を修め、ローマではチベット学権威のトゥッチ教授にチベット学を学んだ。これらのフィールド・ワークに基づいて描いた『未開の顔・文明の顔』（1959）は、人々の異文化への関心を高めるとともに、世界的なスケールで調査と理論化を結び付けようとしたたくましい行動力が話題を呼んだ。

その後、研究はアジア全域にわたり、豊富な調査に基づいた洞察と説得力のある理論によってアジア諸民族の社会的特質をとらえ、日本における社会人類学の研究を飛躍的に進展させた。母系社会論、家族構造論、社会構造論は、同氏の代表的な研究分野であり、中でも著書『タテ社会の人間関係』（1967年）は、日本社会の本質を抽出したのものとして高く評価され、その英語版“Japanese Society”は、英国で出版されたのを皮切りに米国、フランス、中国等世界各地で翻訳、紹介された。「タテ社会」という用語を一般化させるほど影響力の大きかったこの著書は、単なる日本論ではなく、広くアジア地域の社会構造に関する実証的比較研究の一環として書かれ、学界に金字塔を打ち建てたといえる。そして、研究者のみならず同氏の名を広く知らしめることとなった。

また、東京大学東洋文化研究所所長も務めた同氏は、その幅広い人脈と組織力を発揮して多くの研究プロジェクトを生み、数多くの若い研究者を育成した。一方で国際人類学・民族学連合の副会長を10年にわたって務める等、国際会議での活躍もめざましく、その高い国際性には定評のあるところである。

このように、中根千枝氏の学術研究における輝かしい功績は、人々のアジアの諸社会に対する理解に大きく貢献をなしたと評価できるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞学術研究賞・国内部門」に相応しい業績といえる。

芸術・文化賞

氏名 ドナルド キーン
(Donald KEENE)

生年月日 1922年6月18日(69歳)

国籍 アメリカ



プロフィール

ニューヨークに生まれたドナルド・キーン氏は、コロンビア大学で比較文学を専攻していたとき、東洋に興味を持ち、日本語を学び始めた。その後、米海軍日本語学校を経て、コロンビア大学大学院等で本格的な日本文学研究に取り組み、さらに英国ケンブリッジ大学で研究を重ねるとともに日本語講師を務めた。その間、『日本人の西洋発見』を始めとする優れた著作を発表し、1953年には京都大学にも留学して、近世文学を中心に一層の研鑽をつんだ。

1960年に母校コロンビア大学の教授に就任後も、一年の大半を日本で過ごすようになった同氏は、徒然草や近松等の古典文学から太宰治、三島由紀夫を始めとする現代文学、能・狂言等の芸能にわたる幅広い研究を続けている。数多くの著作の中でも、特に大著『日本文学史』(全7巻)は、個人執筆の文学通史として画期的な作品であり、次代の研究者に確固たる基盤を与えている。日本文学・文化の研究、翻訳を通じて、世界中の読者に日本文学、アジア文化のすばらしさを広く紹介した功績は高く評価される。

主な著作

『日本の文学』, 『日本人の西洋発見』1952 『碧い眼の太郎冠者』1958

『Four Major Plays of Chikamatsu』ニューヨーク, 1961 『Landscapes and Portraits』

東京, 1971 『日本との出会い』1972 『World Within Walls』1976

『日本文学史——近代・現代篇(一・二・三・四・五)』1976~89 『日本細見』1980

『私の日本文学逍遙』1981 『日本人の質問』1983

『百代の过客——日記にみる日本人(上・下)』1984 『日本文学史——近世篇(上・下)』1986

『少し耳の痛くなる話』1986 『二つの母国に生きて』1987

『続百代の过客——日記にみる日本人(上・下)』,

『The Pleasure of Japanese Literature』ニューヨーク, 1988

『日本人の美意識』, 『古典を楽しむ』1990

贈賞理由 <ドナルド キーン>

ドナルド・キーン氏は、日本文学研究の国際的な権威である。

コロンビア大学で比較文学を専攻中、日本語を学び始めた同氏は、太平洋戦争に直面して軍務につき、米海軍日本語学校を卒業した。戦後、復員した同氏は、コロンビア、ハーバード両大学院で、本格的な日本文学研究を進め、さらに英国ケンブリッジ大学に留学、自らも日本語、日本文学の講師を務めた。5年間の滞英生活は、『源氏物語』の名訳で知られるアーサー・ウェイリー氏との交流や、『日本人の西洋発見』等の名著を生んだ。引き続き同氏は京都大学などにも留学し、近松研究などを手がける一方、現代日本の作家、評論家などとの交流により、日本文学への視点を古典から現代へ広げた。帰国後、コロンビア大学教授に就任したのちも来日を重ね、現在は日米両国にその活動の拠点を置いている。

同氏の長年にわたる日本文学研究の成果は、その数多い著作によって広く世に知られているところである。豊かな学識に裏打ちされたその分野の幅広さは、『徒然草』などの翻訳、芭蕉の研究など、古典・近代文学はもとより、現代文学や能、狂言等の芸能、歴史にまで及んでいる。同氏が、三島由紀夫、太宰治等の現代日本文学を海外に紹介した功績も大きい。特に、新たな文学史の視点から歴史的な日本人の像を描きあげた点は、高く評価されている。内外に反響を呼んだ『百代の過客』などに代表されるように、紀行文、日記に関する研究分野を独自に開拓したことは、特筆に値する。また、同氏のライフワークともいえるべき大著『日本文学史』は、個人執筆の文学通史として日本国内でも高い評価を受ける一方、海外においては英語で書かれた初めての体系的な日本文学史として、研究者に確固たる基盤を与えている。

同氏は、これらの研究活動を通して、日本人以外は理解が難しいとされていた日本文化への既成概念を打破し、相互理解の進展に貴重な貢献をした。

このように、ドナルド・キーン氏の芸術・文化における輝かしい功績は、世界の人々のアジアに対する理解に大きく寄与したものと評価でき、まさしく「福岡アジア文化賞芸術・文化賞」に相応しい業績といえる。

公式行事スケジュール

行事	日時	場所	内容
授賞式	9月3日(火) 15:00~16:30	福岡サンパレス	・1991年(第2回) 福岡アジア文化賞授賞式 ・参加者:約1,400名
記者会見	9月3日(火) 17:00~17:30	福岡サンパレス パレスルーム A	・受賞者による記者会見
祝賀会	9月3日(火) 18:00~19:30	ホテル ニューオータニ博多 4階「鶴」の間	・受賞者御夫妻、在日アジア 各国大使御夫妻及び留学生 のほか関係者の参加による 祝賀会 ・招待者:約600名
市長表敬訪問	9月4日(水) 13:30~14:00	福岡市役所 特別応接室	・受賞者御夫妻による市長表 敬訪問
記念講演会	9月4日(水) 14:00~16:00	福岡市役所 15階 講堂	・受賞者による記念講演会 ・参加者:約600名

授賞式

日 時：9月3日（火） 午後3時～4時30分

場 所：福岡サンパレス

1991年（第2回）福岡アジア文化賞授賞式は福岡サンパレスで執り行われました。

第2回の受賞者は、大賞がインドのラヴィ・シャンカール氏、学術研究賞・国際部門がインドネシアのタウフィック・アブドゥラ氏、学術研究賞・国内部門が日本の中根千枝氏、芸術・文化賞がアメリカのドナルド・キーン氏の4名でした。

式典は午後3時から、在日アジア各国大使御夫妻、留学生及び学術・教育・芸術・文化関係者、市民等約1,400名の御参加を得て開催され、受賞者の栄誉を称えました。

特に、祝曲として、坂本龍一氏作曲アジアマンス・テーマ曲「ASIAN FLOWERS（アジアの花）」が、同氏が見守る中、九響により演奏されたほか、大賞受賞者である、ラヴィ・シャンカール氏によるインドの古典楽器シタールの特別演奏が行われ、会場内は感動の渦に包みこまれました。

式次第

開	会	15:00	
		贈賞者入場・受賞者入場	
祝	曲	演奏	「双調調子」 演奏：宮田まゆみ
主	催	者	代表挨拶 福岡市長 桑原 敬一
来	賓	挨	拶 地球環境・アジア太平洋協力担当大使 赤尾 信敏
選	考	経	過 報告 福岡アジア文化賞選考委員会委員長九州大学学長 高橋 良平
贈	賞	理	由 大賞選考委員会委員長 九州大学教授 西谷 正
贈	賞		福岡市長 桑原 敬一
受	賞	者	挨 拶 ラヴィ・シャンカール
贈	賞	理	由 学術研究賞・国際部門選考委員長 上智大学教授 石澤 良昭
贈	賞		（財）よかトピア記念国際財団理事長 川合 辰雄
受	賞	者	挨 拶 タウフィック・アブドゥラ
贈	賞	理	由 学術研究賞・国内部門選考委員長 上智大学教授 石澤 良昭
贈	賞		（財）よかトピア記念国際財団理事長 川合 辰雄
受	賞	者	挨 拶 中根 千枝

贈賞理由	芸術・文化賞選考委員長 国立民族学博物館教授 藤井 知昭	
贈賞	(財)よかトピア記念国際財団理事長	川合 辰雄
受賞者挨拶	ドナルド・キーン	
祝曲演奏	アジアマンス・テーマ曲 「ASIAN FLOWERS」	作曲：坂本 龍一 指揮：橋本 久喜 演奏：九州交響楽団
特別演奏	ラヴィ・シャンカール	
閉会	16：30	

司会：山下征治 (NHK 福岡放送局チーフアナウンサー)

受賞者挨拶

ラヴィ・シャンカール

福岡市長、よかトピア記念国際財団理事長、御来賓並びに御参列の皆様、8週間ほど前にロンドンにおいて、福岡アジア文化賞大賞受賞の報に接し、かつてない喜びと驚きを覚えました。

今回の受賞は、私にとりましても、私の国にとりましても大きな荣誉であります。私は、日本とは長期にわたって親しく、そして温かい関係を保っております。また日本の国、そして日本の皆様に、私は大変好意を抱いておりましたので、今回、福岡という素晴らしい街に、殊に、日本に来るのは初めての妻と一緒に来日ことができましたことを大変嬉しく思っております。

福岡市長、よかトピア記念国際財団理事長、そして、福岡アジア文化賞委員会の方々、誠にありがとうございました。



受賞者挨拶

タウフィック・アブドゥラ

福岡市長、福岡アジア文化賞委員会の委員の方々、並びに御出席の皆様方、今回賜りました名誉に対し心より感謝を申し上げます。また、よかトピア記念国際財団、そして福岡市民の方々にどのような言葉でこの感謝を表わしたらよいかわかりません。心からお礼申し上げます。

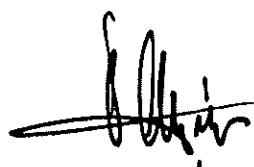
また、他の受賞者の方々のお名前を拝見し、私の感謝は更に深まってまいりました。一体私自身がこのように高名な学者先生や高い文化を修められた方々と肩を並べて良いものかどうか、戸惑いを覚えます。学識者の誰も想像できないような、このような名誉に私が浴しますのも、本国インドネシアの仲間達が健全な学会、知的空間の創造に日夜努めているからであるということを、彼らに伝えたいと思います。

私の国では、つい先月の8月17日に、インドネシア独立46周年を祝ったところです。中央スマトラの小さな村に生まれ育ち、独立当時はまだ幼い少年だった私ですが、若い、自由の闘士達が闘争に赴き、そのうち何人かは、生きて帰らず、自らの英雄的闘争の結実を見ることもなかったことを昨日のここのようにはっきりと覚えております。彼らは、長い間インドネシアの人々が渴望して止まなかった国家独立のために、自らの生命を捧げたのでした。そして今、私は、革命当時、常に恐れや不安が日常の一部だったことだけでなく、両親や周囲の人々が育てていた独立の夢の甘い香りを想い起こしています。ここで皆様のお許しを頂き、私は、この貴重な機会に、きっと今は永遠の眠りの中で微笑んでいるに違いない亡き父と、私達の愛する祖国のために生命を捧げた自由の闘士達に頭を垂れさせて頂きたいと思えます。彼らによって私の中に植え付けられた夢や、彼ら英雄達の犠牲なしには、今、私がここでこのような名誉を受けることはなかったでしょう。今、ここで自分がひとつの自由国家の一市民として皆様の前に立っているということはこの上ない喜びです。

学問の世界に国境はありません。これまでの人生でただの一度も自分がこの世界に入ったことを悔いたことはありません。たとえ、その倫理的基盤の遵守のために、時には高い対価を払うことがあったとしてもです。私は自分が学問の世界に身を置いていることに誇りを抱いています。なぜなら、この世界は、各国間の友情や相互理解を深めるひとつの有効な手段として機能することが出来るからです。その中で私という一人の人間が貢献できることがどんなに小さくとも、私はそれで、誰よりも幸せな人間だと感じています。日々世界が小さくなっていく中で、これから先、よりよい世界を目指し、国々が友情と協力を深めこそすれ、衝突することはないと私は確信しています。

福岡市の指導者の方々、並びに市民の皆様方は、そのような崇高な世界の成就に向けて、素晴らしい基盤を築かれました。心からの深い尊敬と、感謝の意を表します。皆様方の植えられたこの種子が、アジア、そして世界の友好という輝かしい樹木に成長していられることを心よりお祈り申し上げます。

ありがとうございました。テレマカシー。アリガトウゴザイマス。



Taufiq Abdulk

受賞者挨拶

中 根 千 枝

このたびは、はからずも1991年(第2回)福岡アジア文化賞の学術研究賞・国内部門を授与されまして、大変光栄に存じます。と同時に、今まで好きな研究を続けて来ただけの私には、過ぎたお贈り物と恐縮いたしております。

顧みますと、大学時代からずっと今日までアジア諸社会の研究に専念して参りました私にとって、福岡アジア文化賞という名称の賞を頂くことは、殊の外、嬉しく存じます。この受賞に際して、私の脳裡に浮びますのは、インドで、中国で、また東南アジアで、研究に協力して下さった多くのアジアの友人たちです。このニュースに接したら、きっと喜んで下さることと思います。

アジアはもともと生産性が高い土地と、長い歴史に育かれた人材に恵まれた地域です。しかし、今日まだ多くの国々は開発途上国で、各分野でさまざまな努力がなされています。学術研究の上でも、日本人の私たちにとって、こうしたアジアの人々との協力は欠くことができませんし、また、私たちの研究が少しでも多くのアジアの人々のために役に立つことができたら幸いです。

最後になりましたが、福岡アジア文化賞委員会、関係者の方々に特に御礼申し上げたいと存じます。福岡という所が、大陸に向かって開かれた、その地の利と、進取の気性のある人々の特性が相俟って、古くから日本を代表する一つの国際的な活動の拠点であることを考えると、御当地においての受賞は私にとって大変意義深く存じます。簡単ではありますが、これをもって私の受賞のことばとさせていただきます。

中根千枝

受賞者挨拶

ドナルド・キーン

私が福岡を初めて訪問したのは、昭和29年（1954年）の春でした。それより数年前に近松門左衛門の「国性爺合戦」という浄瑠璃とその歴史的背景をテーマとして博士論文を書いたことがありました。この博士論文を提出してのち、とうとう永年の夢が叶い、日本に留学できるようになりました。京都に留学することに決めましたが、どうしても国性爺と関係がある土地を自分の目で見たいと思っていましたので、日本に着いた翌年に九州に参りました。平戸、長崎等を見てから福岡に参りましたが、九州大学の杉浦正一郎教授にお目にかかって、私の次の研究—芭蕉の紀行文の研究—について相談いたしました。

それ以来すでに37年も経ちました。その間に数回程福岡で講演をしたことがありますが、これほどすばらしいことで福岡にまた参るとは夢にも思いませんでした。福岡アジア文化賞の受賞を特に嬉しく思います。と申しますのは、近松の浄瑠璃の正式な称号は、「父はもろこし、母は日本国性爺合戦」だからです。私は博士論文を書いたのち、何回も日本と中国との文化的関係について書いたことがあります。又、明後日、私は中国にある杭州大学で日本文学について講義をします。これからもアジア文化の研究はどんなことがあっても続けていくつもりであります。

ドナルド・キーン

祝曲演奏

唐の楽器として、8世紀ごろ日本に伝えられた「笙」を使い、祝曲「双調調子」が演奏されました。会場には霧がたちこめたような、一種独特の笙の音が流れ、授賞式の雰囲気盛り上げました。

※ 演奏者 宮田まゆみ

1954年、東京に生まれる。国立音楽大学卒業後、音楽美学と雅楽を学ぶ。1979年、国立劇場雅楽古典・新作公演に参加する。1983年、第1回笙リサイタルを開催し、一柳慧氏作曲による笙独奏曲「星の輪」を発表する。1986年、イタリア、フランスの芸術祭に参加、翌年にはニューヨークで笙リサイタルを開催する。

1987年芸術選奨文部大臣新人賞、エイボン女性年度賞芸術賞受賞。

※ 楽器 笙（しょう）

唐の楽器として、8世紀ごろ日本に伝えられました。フリーリードの気鳴楽器で、オルガンと同じ構造を持ち、同時に複数の音を出すことが可能です。吹いても吸っても音が出る構造になっているため、延々と切れ目なく演奏することができます。日本では雅楽の唐楽の楽器として伝承されてきました。

合竹という奏法で複数の音を同時に出し、手移りによって音の組み合わせを徐々に変化させて、切れ目なく演奏します。このため、霧がたちこめているような感じの音に聞こえます。

（平凡社「世界大百科事典」より抜粋。）



アジアマンス・テーマ曲の演奏

世界的に有名な日本の作曲家坂本龍一氏が、「アジアマンス」のために作曲した「ASIAN FLOWERS (アジアの花)」が、授賞式で同氏御臨席のもと、祝曲として九州交響楽団により演奏されました。

※ アジアマンス・テーマ曲 ASIAN FLOWERS (アジアの花)

この曲は、福岡市民のアジアに対する理解を深め、アジア諸国との友好関係をより一層深めていくために、アジアの学術、文化、芸術を中心とした国際的な幅広いイベントを行い、これまで培われたアジアとの交流の輪や市民の国際交流への関心を絶やすことなく、更に育てあげるものとして、市民総意のもと実施する「アジアマンス」のイメージを、広く内外に訴えていくものです。

※ 作曲者：坂本龍一（さかもとりゅういち）

1952年、東京に生まれる。1976年、東京芸術大学大学院音響研究科を卒業。

1978年、ファースト・アルバム「千のナイフ」を発表。その後、細野晴臣、高橋幸宏とYMO（イエロー・マジック・オーケストラ）を結成し、熱狂的な人気を集める。以後、音楽のみならず、映画、ビデオ、出版と多彩なメディアで活躍する。

1983年、映画「戦場のメリークリスマス」（大島渚監督）に出演、音楽も担当する。1987年、映画「ザ・ラスト・エンペラー」（ベルナルド・ベルトルッチ監督）に出演、音楽も担当し、ロサンゼルス映画批評会最優秀オリジナル作曲賞受賞。1991年、映画「ザ・シェルタリング・スカイ」（ベルナルド・ベルトルッチ監督）の音楽で、ゴールデン・グローブ賞最優秀オリジナル作曲賞受賞。

特別演奏

演奏者 ラヴィ・シャンカール氏
楽 器 シタール
伴奏者 アブヒマン・カウシャル（伴奏楽器タブラ）
ガウラウ・マズンダール（伴奏楽器タンプラ）

大賞受賞者であるインドのラヴィ・シャンカール氏が、今回の受賞を記念し、インド楽器シタールの特別演奏を行いました。会場は、アジアの音楽の神髄に心打たれた人々の溜め息ともつかぬ熱気で溢れかえりました。

※ 楽器シタール

シタールは、北インドの撥弦楽器の中で最も一般的な楽器として知られています。本体は、乾燥した木製で、冬瓜やひょうたんなど球状の共振器が上部についています。16～22 箇のわずかに曲がった真鍮、または銀のフレットがフィンガーボード上にあり、その上に7本の主弦、下には数本の共鳴弦が張ってあります。主弦をフレットに押さえつけ、右手につけた針金の爪で掻いて音を出し、共鳴用の球部分を床に据え、斜めにかかえて演奏します。リズム楽器としてタブラを伴い、北インドの古典音楽でソロ演奏に広く用いられます。非常に複雑なテクニックや音楽のシステムが発達しており、今日では世界中で良く知られている楽器です。

（日本文化財団「インドの古典舞踊」より抜粋。）



記念講演会

日 時：9月4日（水） 午後2時～4時

場 所：福岡市役所 15階講堂

1991年（第2回）福岡アジア文化賞記念講演会を、授賞式の翌日、福岡市役所の15階講堂で行いました。

記念講演会は、受賞者と市民が直接的に触れ合うことができる、またとない機会でありますので、広く、市政だより、新聞、ポスター等で参加者の公募を行い、当日は、約600名の参加者を得て行ったところです。

講演は、日本語、英語の同時通訳で行いました。

式 次 第

開 会 14：00

主催者代表挨拶 桑原敬一福岡市長

講 演 中根千枝

 タウフィック・アブドゥラ

 ドナルド・キーン

 ラヴィ・シャンカール



講演するラヴィ・シャンカール氏
Pandit Ravi Shankar gave
a commemorative lecture.



講演するタウフィック・アブドゥラ氏
Dr. Taufik Abdullah elaborated
on his life experiences.

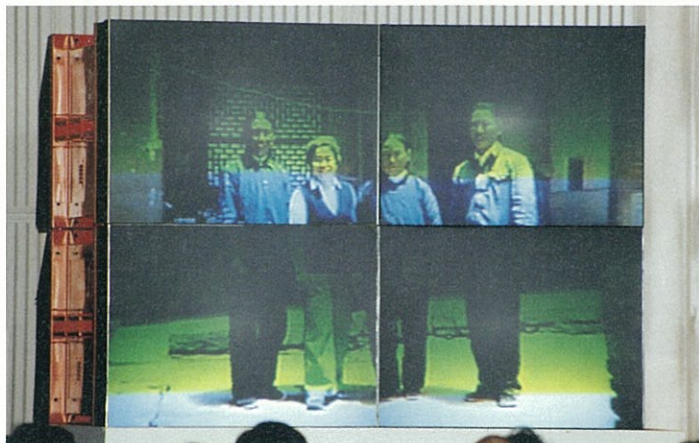


受賞者による記念講演会
The Commemorative Lecture Hall



講演するドナルド・キーン氏
Dr. Donald Keene presented
his commemorative lecture.

講演する中根千枝氏
Dr. Chie Nakane discussed
her perception of Asia.



大型スクリーンによる受賞者の紹介
The slide presentation about
the Prize recipients



約 600 名の聴衆
Over 600 people attentively listened to
the Commemorative Lectures.